

今回から「社員心得帳」という本からです

知識にとらわれない By 松下幸之助

自動車王といわれたヘンリー・フォードの言葉に「いい技術者ほど、できないという理由を知っている」というのがあります。

それは、どういうことかと言いますと、フォードは企業経営において、コンベア・システムをはじめつぎからつぎへと新しいアイデアを生み出した人ですが、それを彼の工場で生かすため、技術者のところへ相談に行くと、「それは社長、無理ですよ、できません。理論上から考えても無理です。」と言うことが多い。特にすぐれた技術の持ち主ほど、そうした傾向が強く、困ったものだと述べているのです。

私は、このフォードの言葉について、これはこれで一つの真理をついていると思います。

というのは、わが国でもよく“インテリの弱さ”という言葉を使いますし、私たちも実際に口にします。しかし、考えてみますと、インテリの弱さというのはおかしな言葉です。十分に学業を修め、知識をもっている人が弱いはずがありません。また、実際、世の中には、ある一定以上の知識がなければできないことのほうが多いと思うのです。にもかかわらず、なぜかインテリが弱いといわれるのでしょうか。

私は、それは結局、その人がもっている知識にとらわれる場合にそうなるのだと思います。

何か一つの仕事に直面した場合、それに関する知識がさほどなければ、“ともかくもまずやってみよう”ということでこれに取り組み、自分なりに懸命に工夫、努力するでしょう。その結果は、多くの場合、相当難しい仕事でもやり遂げることができるものです。

ところが、知識があると、そのことによって“これはむづかしい。ちょっとできそうにない”と最初から考えてしまうことが良くなるのです。そうすると、できるものでもできなくなってしまいます。これはいわば、自分のもっている知識にとらわれた姿といえませんが、そのような場合に、インテリの弱さということになるのではないかと思うのです。

この点は、お互いが社員として仕事をしていく上でも、大いに気をつけなければいけないことだと思います。最近の若い人は、高校なり大学へ行く人が多いですから、皆かなりの学問、知識を身につけています。そして今日では、社会の仕組みも会社の仕事も、いろいろと複雑になってきていますから、若い人たちが高い学問、知識を備えているということは、一面で必要かつ結構なことだと思います。しかし大事なことは、それにとらわれないことです。あまり頭の中だけで考えすぎずに、まず思い切って、実際に仕事にあたってみる。その上で、それをいかにうまくやっていくかということに、持てる知識を活用していく。そうすれば、学問、知識のあることが、大きな力になることでしょう。

特に学校を出たての若いころは、とかく知識にとらわれやすいものですが、その点を十分に心して、“インテリの弱さ”ではなく“インテリの強さ”を大いに発揮してほしいものだと思います。

ヘンリー・フォードは技術者のところへ相談にいくと何と言われましたか？

()

“インテリの弱さ”とは何と言っていますか？

()

若い人たちが学問、知識を持ってうまく活用すればどんな力になりますか？

()